Ruth Slenczynska

Piano Concert

in

OKAYAMA

2003 年 11 月

使用ピアノ
1926年 スタインウェイ
(劉生容記念館蔵)

ルース・スレンチェンスカ

Ruth Slenczynska

1925年カリフォルニアに生まれる。3才の時ポーランド出身のヴァイオリニストである父親からピアノを習い、4才でリサイタルを開き、9才の時ニューヨークでデビュー。

9才の時急病のラフマニノフの代役をつとめコンサートを大成功させる。「モーツァルト以来もっとも傑出した神童」（ニューヨークタイムズ）「彼女は私が知っている限りもっとも才能のある人である」（ラフマニノフ）など最高の賛辞をほしいままに成長するも、スパルタ的な父親に反発し、14才からステージに上るのを拒否。19才で家出して、ひとりで生きる道を選ぶ。

30才の時にステージにカムバックし、またたく間に世界の楽壇で熱狂的に迎えられ、これまで3,000回を超えるコンサートを各地で行い、1960年代までにDeccaより12枚のゴールドディスクを出した。

1960年代より商業的な演奏会を一切中止し、サウスイリノイ大学で教育にも力を注ぎ、名教師としても数多くの優秀なピアニストを育てた。

78才の現在でも年間数10回のステージをこなす現役のコンサートピアニストとして、完璧なテクニックと魂に共鳴する音楽で多くのファンを魅了しつづけている。

彼女の波瀾に満ちた一生は多くのテレビ番組、〈リーダーズダイジェスト〉〈Life〉などで紹介され、2冊の著書〈Forbidden Childhood〉〈Music at your Fingertips〉はロングセラーとなった。音楽誌〈Clavier〉〈Piano Quarterly〉〈Music Journal〉などにも定期的に投稿し、〈Key board〉のコラムニストも長くつとめた。

ラフマニノフ、コルトー、シュナーベル、ホフマン、バックハウスなどの巨匠にも学び、ホロウィッツが唯一尊敬しているピアニストであり（彼女より21才年長にもかかわらず一生親友としてのつき合いがつづいた）、あらゆる名演奏家と親しい友人であったSlenczynska先生はまさに20世紀のピアノの歴史の生きた証人であり、最後の巨匠と呼ばれるにふさわしい。

なお今回は彼女の初めての日本での公開コンサートとなります。

KO IWASAKI

岩崎　洸／指揮

11才より斎藤秀雄氏に師事。1960年、毎日音楽コンクール第１位特賞。その後ジュリアード音楽院でレオナード・ローズ、ハービー・シャビロ、そしてプエルトリコにてパブロ・カザルスに師事。

1965年「カザルス音楽祭」をふり出しに、マールボロ、クフモ、ザルツブルク、ロッケンハウス、アスペン、ウォータールー、シアトル、ポーランド、スペイン等の音楽祭に招かれ、世界の著名な音楽家と共演する機会を得ている。1967年から1970年、ウィーン、ミュンヘン、ブダペスト、カサド、チャイコフスキー等の国際音楽コンクールに連続上位入賞後、ニューヨーク、ロンドン、アムステルダム、パリ、ハンブルグ、ローマ、モスクワ各地で演奏を行い、好評を博した。

1970年芸術選奨、文部大臣新人賞を受賞、国内でのレコードは東芝ＥＭＩより「ベートーヴェンのチェロ・ソナタ全集」を初めとして、1971年「現代日本チェロ名曲大系」を録音、芸術祭国内レコード大賞、併せて「レコード・アカデミー大賞」も受賞。また、外国ではギドン・クレーメル等とのカルテットをフィリップス・レコードより出している。1971年には「東京チェンバー・ソロイスツ」を企画構成。

また、1979年より沖縄にて、姉の岩崎淑と共に「沖縄ムーンビーチ・ミュージック・キャンプ＆フェスティヴァル」を毎年開催し、若い人々の支持を得ている。現在、アメリカ・イリノイ州立大学でレジデント・アーティストを経て、同大学客員教授、桐朋学園大学院大学教授。ジャパン・ストリングクァルテットのメンバー、倉敷音楽祭監督。

倉敷管弦楽団　*KURASHIKI-ORCHESTRA*

「美しい音色とよいアンサンブルで質の高い演奏を」を合い言葉に1974年設立。1982年岡山県文化功労賞、1985年倉敷文化連盟賞を受賞。演奏曲はバロックから現代曲までと幅広く、團 伊玖磨氏作曲「管弦楽のための高梁川」、小六 禮次郎氏作曲「瀬戸内賛歌」を初演。オペラでは「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「カルメン」、「コウモリ」、「ヘンゼルとグレーテル」、「蝶々夫人」等を演奏。

創立10周年記念演奏会では400名からなる第九演奏会、15周年では「三枝成彰with倉敷管弦楽団スーパードリーム・ジョイントコンサート」、20周年ではイヴリー・ギトリス氏、岩崎 洸氏との「コンチェルトの夕べ」を開催。倉敷音楽祭へも毎年のように出演し、ミュージカル「11匹のネコ」、ヘンデル「メサイア」、プッチーニ「ラ・ボエーム」その他を演奏し大成功をおさめた。21世紀の最初を飾って、ベートーヴェンの「第九」、2002年３月にはオペラ「夕鶴」、2003年はビゼーの「カルメン」全幕を演奏した。

PROGRAM

リサイタル
in
劉生容記念館

Liu Mifune Art Ensemble

11月5日

1．ブラームス　　2つのラプソディー 作品79　　(1879年)

Brahms　　2 Rhapsodies op.79

第1番　ロ短調

2．ショスタコーウィッチ　　24の前奏曲とフーガ 作品87　　(1951年)

Shostakovich　　24 Preludes and Fuga op.87

第5番　ニ長調

3．ベートーヴェン　　ピアノ ソナタ 第7番 ニ長調 作品10－3　(1798年)

Beethoven　　Piano sonata №7 in Dmajor op.10－3

Ⅰ　Presto　　Ⅱ　Menuetto allegro

Ⅲ　Largo e mesto　　Ⅳ　Rondo allegro

4．ショパン　　24の前奏曲 作品28　　(1836～1839年)

Frédéric Chopin　　24 Préludes op.28

全 24 曲

PROGRAM

リサイタル & 協奏曲
in
岡山シンフォニーホール

11月7日

ショパン　24の前奏曲 作品28　(1836～1839年)

Frédéric Chopin　24 Préludes op.28

全 24 曲

休けい　20分

サン＝サーンス　ピアノ協奏曲第2番 ト短調 作品22　(1868年)

Saint Saiens　Piano concert №2 in Gminor op.22

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート

第2楽章　アレグロ・スケルツァンド

第3楽章　プレスト

指揮　岩崎　洸

倉敷管弦楽団

PROGRAM

リサイタル
in
劉生容記念館
Liu Mifune Art Ensemble

11月8日

1．ブラームス　2つのラプソディー 作品79　(1879年)
Brahms　2 Rhapsodies op.79

第1番　ロ短調

2．ショスタコーウィッチ　24の前奏曲とフーガ 作品87　(1951年)
Shostakovich　24 Preludes and Fuga op.87

第5番　ニ長調

3．ベートーヴェン　ピアノ ソナタ 第7番 ニ長調 作品10－3　(1798年)
Beethoven　Piano sonata №7 in Dmajor op.10－3

Ⅰ Presto　Ⅱ Menuetto allegro
Ⅲ Largo e mesto　Ⅳ Rondo allegro

ラフマニノフ
Rakhmaninov

4．ひなぎく　作品38の3
Daisies op.38－3

5．13の前奏曲　作品32－1
13 Preludes op.32－1

6．13の前奏曲　作品32－5

7．10の前奏曲　作品23－2

8．13の前奏曲　作品32－13

ショパン　練習曲 作品10　(1829～32年)
Chopin　Etudes op.10

9．第1番　ハ長調

10．第2番　イ短調

11．第3番　ホ長調
〈別れの曲〉

12．第4番　嬰ハ短調

公開レッスン　11月9日

岡山県立美術館ホール

1時～9時

〈5時～6時：お話－インタビューア　三船文彰〉

講演とコンサート　11月10日

作陽音楽大学

3時～5時

使用したピアノについて －1926年 スタインウェイー

（弘中俊也氏の献身的な調律に感謝致します）

楽器にも運命もしくは自分の意志というものを持っているのだということをこのピアノによって、今でも日々実感させられている。

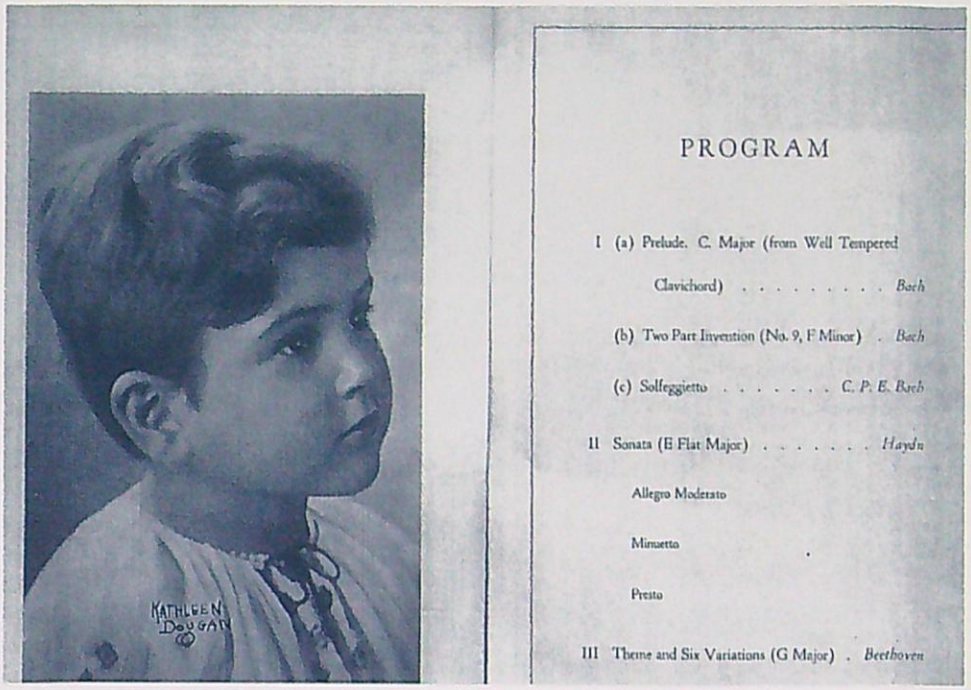
10年前知人の紹介でこのピアノと対面した時のことはいまでも忘れられない。主のいない何年も閉め切った部屋の中で厚いほこりを被って、このピアノはじっと耐えているように見えた。ただの粗大ゴミではないかというみんなの反対を押し切って家に引き取り、整理したり、調律したりするだけで日に日に音が出てきた。

わが家にきてから2年過ぎたある日、たまたま神戸へ出かけていた家内が地元の新聞にスタインウェイの修復に一生をかけている磯田耕治さんという方の記事を見つけたご縁で、磯田さんにピアノのオーバーホールをお願いすることとなり、半年の予定で神戸の彼の工房へ送ったが、予定より大分早く完成して岡山に戻った2週間後に阪神大震災が起こり、東灘区にある彼の工房が全壊、きわどい所でピアノが命拾いをしたことからこのピアノの持っている運命の力を感じるようになった。

その後このピアノがいきるようにとのことで、ピアノのために小ホールを作らされ、数々の一流のピアニストに弾かれる身分にのし上がり、そして今回、大ホールで最高の巨匠によって皆様にラフマニノフの生きていた時代の最良のスタインウェイの音色を披露するまでになってしまった。

ピアノに踏み台にされ、すねを齧られるばかりの私ではあるが、このピアノが自分の行きたいようにこれからも手助けをし、そして次の世代へすばらしい状態で引き継がれていけるよう面倒をみていくつもりである。

（三船文彰）



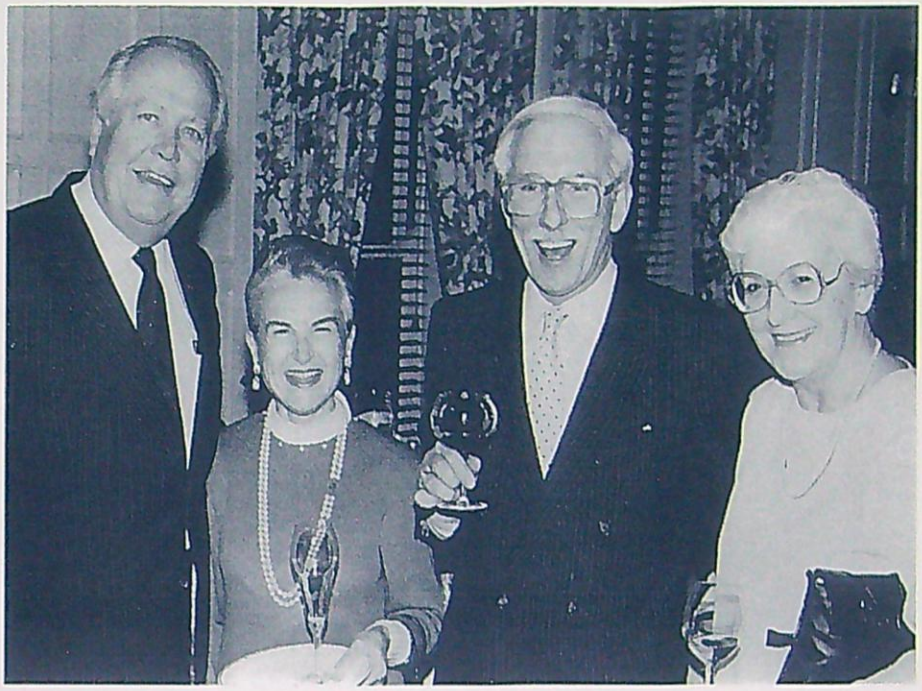
4才の時のリサイタルのプログラム

名ピアニスト ホフマンのレッスン

コルトーに７才から14才の７年間師事

９才の時ラフマニノフのコンサートの代役をつとめたことで２年間ラフマニノフからレッスンを受けた。（ラフマニノフの唯一の弟子）

指揮者ユージン・オーマンディと



（向かって右）夫君の James Kerr 教授

指揮者スラトキン氏とは長年の友人

南米の演奏旅行の時　作曲家ヒナステラと

Slenczynska 先生　語録

「どのステージにおいても、私はできる限りの最高の演奏でもって、すべての聴衆に一生忘れ得ない美しい音楽を届けられるよういつも努力しています。」

「どんな人にとっても一日９時間ピアノの前に坐って練習するのは正常なことと言えますか？しかも一番むずかしいことは、練習することではなく、そのような苦しい練習のあとでもまだ音楽が好きでいられることです。」

「練習をつづけることは確かに非常にむずかしいことである。しかし音楽家として一番大切なことは自分の感覚に忠実に従い、自分がどのような音を出したいのかを明確に知り、自分の弾きたいものが出せない限り、ピアノを離れてはいけないことである。」

「もしあなたは二流のピアニストでいいと思ったら、永遠に二流のままでしかない。私ですか？私は二流にはなりたくないが、私は他の人とは比較しません。私は一番よかった自分としか比べません。もし今日の出来がよかったのなら、次はもっとよくなるはずです。」

「音楽の学習はまず「聴く」ことから始めなくてはいけない。」

「芸術家になるためにはもろもろの能力が必要である。卓越した想像力、弛まぬ努力、高度の感受性と環境適応能力、どんな困難な情況下でも目標に向かって邁進する不屈な精神、そして自分の芸術に執着すること、そのために多くの人から冷遇されようとも！」

「私のこのような身長と小さい手でどうしてこんな大きな音が出せるかですって？こんな私でもできるのだから皆さんは私よりずっとうまく演奏できるはずです。」

（三船文彰 訳）